銀鈴

第貳拾六號

明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日發行）
明治四十年十月二十五日發行

銀鈴

第貳拾六號
明治四十年十月廿五日發行

長恨記

河野翠瀲

「是非逢ひたいのですから――何分にも計つて見て下さい。」

「ではございませうけれど、ご親類の方だつて皆んなお斷りしてゐますやうな譯なんですから。」

「出來んのですか。」

十年餘りも交り合つた友だ、彼も咄したから我も――せめてはこの世の名殘りに、今ひと目逢ふて、心善く別れの言葉が交したい。自分は今、避病院の受附の、廊下に立つてゐるのである。

「唯、五分間でいゝのです、咄をして惡るけりや會つただけで滿足しませう。」

「いゝね。」と看護婦は遮つて、「熱も大分高まつて居ますし、主治醫の方は今朝ッから、附切りの姿です、何うして貴下、妾からお願ひ

したところで、許して貰へるこつちやありません。お諦めなすつて、ね、れ歸んなさいましし。」

「ぢや、最う死ぬるやうに、そんなに惡いのですか。」

「そうぢやありませんけれど、ご病氣がご病氣ですからねね。」と、看護婦は愁然とした。

「いや、是非會はせて貰ひませう、僕は今朝夜の明けるのを待ち兼ねて、三里といふ道を飛んで來たんです、一体夢見が可くなかつた。けれども斯んなにあらうとは知ませんでした、何うせ死ぬる病氣ぢやあるんですけれどそれはど危篤だとは、今承つたばかりです

又明日にも來られる僕の身なら、死にはすまいといふ望を繋いで、出換へることも出來まするものゝ、今日會はなかつたら、一週間ばかりは、何んなことがあらうと、出られる軀ぢやないんですから、無理にも逢はせて戴かなきや……。」

「ねゝ、能く判つて居ます、お察し申しますわね。」

「だから——。」

「いゝね。——お傳へ申すことがありますれば何なりとお談置き下さいまし、面會はあの制規が許しませんのですから。」

「出來んのですか。」

「はい」

「ぢや僕が行く。」突き飛ばして入らうとする、(あれー)と看護婦は大業に聲を立てた、

「何うした、何うした。」と洋服の男が驅け出る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

自分は門外に引ッ張り出されたのである。

「萬事休矣」顧みれば白堊の洋館、巍々として聳ゑ立ち、一私人の侵すを容すべくもない。あゝ友は今日、恐るべき避病院の薄暗い一室に、薄命なる彼が生涯を終るのだと、自分は、柵に凭つて悚然とした。

――完――

長江萬里情

森脇桃村

知らずいま顏はのほてり胸さわぐ君におもはれ在る日のやうに

こは夢かあらじと思ふ髪たわゝ長き袖ふり來るみ姿

ひたひたと潮よせ來るあゝ君を迎ふる心地盖し似たらむ

木村秋浦

夜晝なくおんおも影をよろこびの心の上に火の珠と置く

野をめぐり流れぬ秋の水一路清き枕し月山を

出づ

服部紫葉

亡き父のみ墓のまへに萬物の哀愁を知るはつ秋のかぜ

みなさけのみたまづさ得ぬすがれたる心の野邊に君をこそ祝げ

靄ふかき麓路をゆくれの〳〵の戀に音をなく蟲あまた聽き

河野翠激

死といづれ我は擇ばむ面のあたりわが大恩の人妻を戀ふ

言ひも兼ね少女よ汝みづからの命早うす我君を泣く

平らかに心を持たむ一瞬の前の覺悟を忘れ君見る

君知るや君が心を捕へむと一族こぞりあはれ用意す

さまざまの惡夢をおそれ夜もすがら寢ぬ夜つもりぬ又月を超ゑ

わが胸の壁に誰がせし落書ぞ消しも能はぬ憶病を知り

いつはりを藏し給へり答ふ否さらばわが臓割くにまかせむ

さりげなくよそひたまへや人々のねたみ君をも害ひぬべき

夏秋雜吟（集句募）

羽　風　選

卓上のビールの泡や風薫る　楚樣
短夜や網打ちに出る水の家　五呑
やゝ寒き花壇に散るや秋櫻　佛丈
山寺の晋山式や柿の秋　同
やゝ寒き白雲湧くや海の果　同

梧　月　選

鶯や鳥屋の軒に老をなく　嵐江
薫風や樹下石上に仙を擬す　楚樣
短夜や鏡に向ふ旅女　五呑
朝浴や離亭の殘花ほの見ゆる　同

殘る花竹裡に足を運びけり　同
繩曳て棧敷定めや草紅葉（村芝居）　佛丈
裏町や下水溢るゝ秋の雨　同
馬小屋の掃かぬ戸口や秋の雨　同
廢船に腐る錨や秋の雨　同
鳩吹くや我が影長き暇道　雨翠
鳩を吹く顔につれなき小雨哉　同
兀として殘暑の空の孤山かな　同
秋立つや寺の銀杏の梢より　同
門内に五歩の畑あり唐辛子　同
廢院や芙蓉の中に古井筒　同
强られてうかりける身も踊哉　同
世を易く住みなす老や鷄頭花　同

鶏頭や紅競ふ夕日影　同
この村の大百姓や鶏頭花　同

羽風、梧月選

若葉路一山の風吹き通る　楚樣
立琴の糸やゝ寒き空音かな　佛丈
婿入りや梨の村から柿の村　同
柿數多核云ひ當てゝ食ひ鳥　同
長安に上る學徒や初嵐　雨翠
樹に上る猫の眼や初あらし　同
此村の踊り上手や老いにけり　同
風呂の湯を抜く音や町の明易さ　五呑
峽中の草家殘花に閉したる　同
蓬焚く僧や野寺の佛生會　同

橋守の古きを吊りし蚊帳かな　同

▲原稿〆切十一月十日▼

女流作家

・　啞々

大塚楠緒子岡田八千代の二女史は、我が小說壇に於ける閨秀作家として鏘々たるものだ。

近來屢々女史等の創作を紙上に見ることを得るのは、我等讀書子の極めて愉快とする所である。彼は淸楚、是は洒脫、深窓の美姫と町家の婀娜物、蓄し筆の相異るもの實に斯の如しか。

偶成吟

三明千鳥

罪の子等みな燒かむとて
日の大み神息荒く
今萬物を震はしむ。

怠れるもの一樣に
驚異の眼みひらきて
わとこそ叫べ、世の嘆き。

詩人よ起てや命運の
咀ひは來る――秋のこゑ
今萬物は目覺めたり。

▲寄贈新刊　△富士△朝虹（三の九）△かすみ△八雲△五月（四の九）△白菊△青葉（二の八）△明ポノ△野の花（十四）△山鳩（四三）△茶話會△三餘の友△浮城（四の十一）△白虹（三の六）△浪花

▲社告　△俳句募集は冬季に移る△本號所載の募集句には入賞のものが無い△前號本誌卷頭朝顏の作者すがはら人は本社の菅原紅雨とは全たく別人だ△本誌前號は一部の殘本もない、前月より一部賣の制を廢したから三冊以上の申込でなければ應じ難い從て印刷期日前註文を受けねば發送することが出來ぬ印刷するに一部の餘裕も設けぬから△最近入社の社友は正岡蘇庵金田榮十の二氏である

銀鈴　三冊郵稅共拾參錢六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　一頁壹圓　半頁前金六拾錢

明治四十年十月廿三日印刷
明治四十年十月廿五日發行　（銀鈴廿六號）

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人　河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所　赤名活版所

發行所　石見國邑智郡所田村　銀鈴社

明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日發行）
明治四十年十月二十五日發行